教育実習生の評価についての研究 I
――幼稚園教育実習生の印象を中心として――

木　内　菜保子

The Study of Evaluation of a Student Teacher I
― Focusing on an Impression of a Student Teacher at Kindergarten ―

Naoko Kiuchi

要　旨

本研究では、幼稚園教諭の実習生の外見や所作のとらえ方の実態をアンケート調査した。その結果、実習生の行動では、学生ではあるものの実習の場では「幼稚園教諭として」のふるまいが重要視されていた。また、実習生の印象も「幼稚園教諭としてあるべき姿」が基準だった。これらのことから、実習生評価は一般的な印象の影響はないことが明らかになった。同時に、知識や技術ではない実習生の行動が、教員としての資質や教職に対する熱意を量る材料となっている可能性が考えられた。さらに調査を進めていくことで、資質や熱意などの目に見えないものの評価基準を構築できることが示唆された。また、「幼稚園教諭としてのあるべき姿」は幼稚園や各教諭によって異なることも推察された。そのため、実習生評価については、ルーブリックなど評価基準と到達度を明瞭にすることが必須であることも明らかとなった。

キーワード：実習生、印象、幼稚園教育実習、幼稚園教諭

1. はじめに

保育者養成の課題は、保育を構想する力や実践する力の基盤を形成していくこと、理論と実践を結び付ける機会を実習に限らず設けることなどがある。これらは、多くの養成校で創意工夫され取り組まれていることである。しかし、将来の保育者には、これらの知識や技能といった学習などにより獲得されるものだけでなく、保育や幼児教育に熱意があるという本人の資質も重要である。知識や技能はそれそのものの可否が明確にとらえられるため、ルーブリックなど評価基準を設ければ人によって異なることなく、概ね一定の判断ができる。しかし「熱意」については、それそのものが見えるものではないため、評価基準を設けたとしても一定にすることは難しいだろう。

例えば「事前準備の有無」を、熱意をはかる軸の１つと仮定する。実習生が事前準備をしていても、自ら準備物の提示をせず、実習先指導担当教員に問われてやっと提示したという場合ではよい印象とはならず、「熱意（やる気）が足りない」と考えられることもあるだろう。「熱意」の評価軸として場合、「有無」だけをみれば「有」となり問題がなくても、「熱意がある」との評価はしがたい。このように可否で明確にとらえられないものの判断には、少なからず印象が影響を及ぼす

であろう。このような行動以外にも、印象を与えるものを考えた場合、外見や所作も挙げられる。このような実習生の行動や外見、所作などが、あらゆる場面で実習先指導担当教員に何らかの印象を与えていることを踏まえれば、それが少なからず評価に影響を及ぼすと推察される。

そこで、実習生が与える印象と評価の関係性に注目した。まず、本研究では、幼稚園教育実習を中心として、幼稚園教諭が実習生の外見や所作をどのようにとらえているのかの実態を、アンケート調査をもとに明らかにしていく。

2. 先行研究概観

学外実習の評価については、ルーブリックを用いた評価の研究が、中嶋一恵ら（2014）や加藤孝司ら（2017）、尾崎司ら（2017）などにより行われている。いずれの研究でもルーブリックを用いた評価の有効性が述べられている。具体的には、評価の観点とその達成度の基準があることは、養成校と実習先との相互理解を深め、実習園と養成校が協力して保育者養成に取り組めるという効果である。また、学生にとっては実習に向けて明確な目標を持つことができ、実習後の振り返りを深める効果があることも明らかにされている。

しかしながらいずれも、評価者に与える印象が及ぼす影響については言及されていない。つまり、印象と評価の関連性を研究しているものはない。

一方、柳澤さおりら（2000）は、対人評価の正確性の問題点として利害や人間関係、好悪感情などが絡み、バイアスが生じない評価は不可能であることを指摘している。また、佐藤綾子（2014）は、人間関係おける第一印象の重要性を述べている。第一印象は出会った2秒間で決まり、その第一印象はなかなか変わることはない。

学外実習の評価者と被評価者の関係である、実習先と実習生の関係において利害はないと考えられるが、人間関係や好悪感情などは存在しないとは言い切れない。実習期間という状況であっても、同じ職場の職員として行動する期間であるため、ある種の人間関係は構築されてしかるべきである。

人間関係を構築していく際の第一印象の重要性を踏まえれば、実習生が与える印象が評価に対して何らかの影響を及ぼすことも考えうる。

3. 調査方法

(1) 調査対象

私立T大学と幼稚園教育実習で関係があった幼稚園　178園

(2) 調査期間

平成29年3月1日から平成29年3月21日

(3) アンケート概要

回答は、園長及び実習指導担当教諭に回答を求めたが、役職は制限しなかった。

また、アンケート内容は、幼稚園教育実習生の見た目の姿への印象及び行動について注目する内容を問うものである。

特に、見た目の姿への印象という観点で、「化粧」について問う項目を設定した。近年では、化粧については性別の差が曖昧になってはいるものの、女性に特有なものととらえられがちではある。本論のアンケートでは、幼稚園教育実習生には女子学生の数が多いという実態に照らし合わせ、「化粧」の項目を設定した。

4. 結果及び考察

アンケートを依頼した幼稚園のうち、84園（47.19％）から回答が得られた。対象者の役職は園長及び実習指導担当教諭として回答を求めたが、各園の事情に合わせて回答があり、役職は様々だった。また予備を含め3部のアンケート用紙を送付したところ、1園からの回答数が1から3人と一定ではなく、総回答者数は199人（男性16人、女性183人）だった。回答者の属性は表1に示す。

表１　回答者について

年齢	人数	役職	人数	幼稚園教諭歴	人数	実習指導歴	人数
20 代	52（26.13）	教諭	91（45.73）	1～ 4 年	23（11.56）	1～ 4 年	35（17.59）
30 代	47（23.62）	主任教諭	50（25.13）	5～ 9 年	44（44.11）	5～ 9 年	49（24.62）
40 代	45（22.61）	主幹教諭	1（ 0.50）	10～14 年	40（20.10）	10～14 年	30（15.08）
50 代	32（16.08）	園長又は教頭	21（10.55）	15～19 年	18（ 9.05）	15～19 年	23（11.56）
60 代以上	22（11.06）	園長	35（17.59）	20～24 年	25（12.56）	20～24 年	18（ 9.05）
不明	1（ 0.50）	事務	1（ 0.50）	25～29 年	14（ 7.04）	25～29 年	5（ 2.51）
				30 年以上	34（17.09）	30 年以上	17（ 8.54）
				不明	1（ 0.50）	不明	19（ 9.55）
						無し	3（ 1.58）

人（%）

表２　実習生の行動への注目

	挨拶	言葉使い	子どもへの対応	報告・連絡・相談すること	教員への対応	所作	質問すること	会話	掃除などの家事的な内容	作業結果
得点	272	477	484	812	966	979	1084	1134	1305	1421
1 位	**119 (71.26)**	6（ 3.59）	37（22.16）	4（ 2.40）	0	0	1（ 0.60）	0	0	0
2 位	26（16.17）	**79 (47.31)**	32（19.16）	17（10.18）	3（ 1.80）	3（ 1.80）	1（ 0.60）	6（ 3.59）	0	0
3 位	9（ 5.39）	44（26.35）	**51 (30.54)**	21（12.57）	12（ 7.19）	9（ 5.39）	8（ 4.79）	9（ 5.39）	3（ 1.80）	1（ 0.60）
4 位	6（ 3.59）	20（12.00）	23（13.77）	27（16.17）	**34 (20.36)**	28（16.77）	14（ 8.38）	10（ 5.99）	5（ 2.99）	0
5 位	2（ 1.20）	10（ 5.99）	17（10.18）	**33 (19.76)**	24（14.37）	26（15.57）	28（16.77）	14（ 8.38）	11（ 6.59）	3（ 1.80）
6 位	1（ 0.60）	6（ 3.59）	3（ 1.80）	29（17.37）	33（19.76）	**30 (17.96)**	19（11.38）	24（14.37）	14（ 8.38）	7（ 4.19）
7 位	0	1（ 0.60）	2（ 1.20）	21（12.57）	24（14.37）	23（13.77）	**35 (20.96)**	17（10.18）	29（17.37）	15（ 9.00）
8 位	3（ 1.80）	1（ 0.60）	1（ 0.60）	11（ 6.59）	11（ 6.59）	16（ 9.59）	29（17.37）	**36 (21.56)**	36（21.56）	19（11.38）
9 位	0	0	1（ 0.60）	1（ 0.60）	16（ 9.59）	16（ 9.59）	20（12.00）	26（15.57）	**44 (26.35)**	36（21.56）
10 位	1（ 0.60）	0	0	2（ 1.20）	7（ 4.19）	9（ 5.39）	9（ 5.39）	20（12.00）	25（14.97）	**78 (46.71)**
不要	0	0	0	1（ 0.60）	3（ 1.80）	7（ 4.19）	3（ 1.80）	5（ 2.99）	0	8（ 4.79）

人（%）

(1)　実習生の行動への注目

実習生の行動について、10 項目を挙げ、注目する順に順位を、また不要と思われるものにはバツ印をつけてもらった。順位の重複があったものや未記入欄があったものを除き、有効な回答は 167 人（83.92％）だった。結果は、表２に示した。得点はつけられた順位の数字を合計したもので、得点が低いほど注目順位が高いといえる。また、各項目で最も多い回答者数を太字にしている。また回答者数が１桁の人数だったものは網掛けをしている。表２は、左から注目度が高いと考えられる項目を示している。

各項目について具体的に見ていくと、「挨拶」を１番に注目すると回答した者は 119 人（71.26％）、次いで「言葉使い」は１番目に注目するという回答は極めて少ないものの、２番目と回答した者が 79 人（47.31％）だった。これらの２項目では他の項目に比べ、特に意見が集中していた。「子どもへの対応」については、３番目に注目すると回答した者が最も多かったが、１番目や２番目に注目すると回答した者は、それぞれ 37 人（22.16％）、32 人（19.16％）と 30 人を超えていた。他の項目の最も回答者が集中している順位の人数は、「報告・連絡・相談すること」33 人（19.76％）、「教員への対応」34 人（20.36％）、「所作」30 人（17.96 ％）、「質問すること」35 人（20.96％）、「会話」36 人（21.56％）であり、いずれも 30 人程度が、その項目で最も回答が集中する順位の人数になっている。これらを踏まえると、「子どもへの対応」に対する注目は回答数の

集中では３位ではあるが、注目度は高いと考えられる。

次に得点をみると、５つの分類を考えることができる。ここでは便宜上、第１郡「挨拶」、第２郡「言葉使い」「子どもへの対応」、第３郡「報告・連絡・相談すること」「教員への対応」「所作」、第４郡「質問すること」「会話」、第５郡「掃除などの家事的な内容」「作業結果」と分類する。

第１郡の「挨拶」は人としての行動の基本であり、最も注目される点であることは容易に理解できる。第２郡の「言葉使い」は特に誰に対しての言葉と指定はしていないが、「子どもへの対応」と考え合わせると、実習生が実習生活の中で出会う人に対して発するものと考えられる。これら第１郡、第２郡の項目は、子どもに対しての影響が極めて大きいものである。このことから、実習という場においては、まず第１に「人」としての行動が注目されていて、次に「学生」ではなく「教師」としてのふるまいが注目されていると考えられる。次に、およそ同程度の回答が得られたと考えられる第３郡の項目は、「報告・連絡・相談すること」「教員への対応」「所作」だった。実習期間中の生活を踏まえた養成校での実習指導でも、第１郡、第２郡の内容は、人として、あるいは教員になろうとする人材として重要なことと考えられるものである。これらの点は幼稚園教諭と養成校実習指導担当者間のどちらにとっても、実習生について注目することとして捉えられている。

養成校の指導では、「挨拶」や「言葉使い」、「子どもへの対応」の次に、実習期間中の生活では「報告や連絡、相談」、さらに「質問すること」などが指導内容として重視されていると考えられる。しかし、本調査結果で得られた幼稚園教諭の注目する点は、挨拶などの次に「教員への対応」「所作」が上位となった。「教員への対応」では、幼稚園教諭として同じ職場で働く場合を想定し、その行動を注目していると考えられる。実習生は免許取得以前の学生であり、実習期間だけの幼稚園組織の一員ではあるが、その一員としての人間関係やそれを構築していく姿が注目されているのではないだろうか。また「所作」については、その人の人柄や生活経験が表れるものであり、学習による知識や技術の獲得とは直結していない。

これらの注目する行動についての調査結果から、技術や知識ではない点が、幼稚園教員が実習生の教員としての資質や教職に対する熱意を量る材料となっている可能性が考えられた。

(2) 実習生の外見についての注目

実習生の外見についての調査結果及び考察は、「化粧」「髪色・髪型」「服装」の項目に分けまとめていく。

1) 実習生の化粧について

近年では、女子中学生や女子高校生の化粧が珍しいものとはいえなくなっており、女子大学生が化粧をすることも日常的になっている。また、普段化粧をしないことに対して抵抗を持つ女子大学生も少なくはない。しかし、実習においては出会う子どもたちのアレルギーなど、実習生の化粧品が及ぼす子どもへの影響を考え、実習指導担当者としては実習生にはできる限り化粧をすることは避けさせたい。また、年齢や流行によって化粧についての価値観は様々で、化粧の程度のとらえられ方も一定ではない。そこで、実習生の化粧について、幼稚園教諭に尋ねた。

まず、実習生が化粧をすることを認めるか認めないかについての回答結果を園の単位でみてみる。回答があった84園のうち、化粧を認めないと回答した園は６園（7.14%）だった。また、同一園内で可否の回答が混在している園は11園（13.10%）だった。これらを合わせても化粧に対して否定的な園は17園（20.24%）しかなかった。５園（5.95%）は未回答であったが、その他の62園（75.61%）では化粧は認められていた。

また、どの程度、化粧を気にするのか尋ねた結果について、個人の回答を表３にまとめた。化粧を認める者と認めない者で「気になる」「まあ気

表３　実習生の化粧を認めるか・気にするか（個人）

	総数	気になる	まあ気になる	あまり気にしない	気にしない	未回答
認める	175（87.94）	26（13.07）	91（45.73）	50（25.13）	4（2.01）	4（2.01）
認めない	19（ 9.55）	9（ 4.52）	9（ 4.52）	1（ 0.50）	0	0
未回答	5（ 2.51）	—	—	—	—	—
回答者数	199	35（17.59）	100（50.25）	51（25.63）	4（2.01）	4（2.01）

人（%）

表４　あまり気にしないと回答した人の年齢とその年齢での割合

年齢	人数（人）	年齢の割合（%）
20 代	21	40.38
30 代	11	23.40
40 代	9	20.00
50 代	7	21.88
60 代以上	7	31.82

になる」と回答した者は 135 人（67.84％）だった。多くの幼稚園教諭が、実習生の化粧を認めつつも、やはり化粧は気になっている。

一方、「あまり気にしない」「気にしない」と回答した者は 55 人（27.64％）だった。これらの回答者について、表４として年齢別にその割合を示した。20 代の回答者は約４割、他の年代は約２割程度が気にしないという回答だった。割合の差が大きくなる 20 代と 30 代の間で、化粧に対しての価値観が変わっていくことが推察される。また、年齢を重ねることで構築され深められていくのであろう教育観の影響も考えられる。

2）　実習生の髪色・髪型について

髪色や髪型について気にするかを尋ねた結果は、表５に示す通りである。髪色、髪型についてそれぞれ「気になる」「まあ気になる」の回答者は、185 人（92.97％）、167 人（83.92％）だった。化粧に比べ、髪色や髪型は気にするという回答が目立った。特に、９割を超える回答者にとっては髪色が気になるものであることや髪型でも８割を超える回答者にとって気になるものであることから、髪色や髪型は重要な注目ポイントになっているといえるだろう。このことから、個性的な髪色をした実習生の受け入れ経験や、実習生が活動する姿の髪型について問題を感じる場面を数多く経験したことが推察できる。

3）　実習生の服装について

服装について「色合い」「サイズ感」「素材」「清潔感」「アイロン等の手入れ」の５つの項目について、注目する順を尋ねた。未記入や同じ順位ばかりを書いている回答を除き、有効回答数は 193 人（96.99％）だった。表６に示すように、「清潔感」が最も注目されており、次いで「サイズ感」「色合い」の順となった。得点はつけられた順位の数字を合計したもので、得点が低いほど注目順位が高いと考えられる。各項目で回答者数が１桁の人数だった部分は網掛けをしている。

実習の場は、子どもたちだけでなく幼稚園の教職員や在園児の保護者など、人と接する場であることを考えれば、清潔感を感じられることが重要

表５　実習生の髪色と髪型及び化粧について（個人）

	気になる	まあ気になる	あまり気にしない	気にしない	未回答
髪色	94（47.24）	91（45.73）	10（5.03）	4（2.01）	—
髪型	86（43.22）	81（40.70）	29（14.58）	3（1.51）	—
化粧	35（19.60）	100（50.25）	51（25.63）	4（2.01）	4（2.01）

人（%）

表６　服装の注目順位

	清潔感	サイズ感	色合い	アイロン等の手入れ	素材
得点	209	507	540	580	686
１位	178（92.23）	9（ 4.66）	6（ 3.11）	0	0
２位	14（ 7.25）	64（33.16）	57（29.53）	43（22.28）	9（ 4.66）
３位	1（ 0.52）	76（39.38）	49（25.39）	38（19.69）	18（ 9.33）
４位	0	23（11.92）	42（21.76）	45（23.32）	61（31.61）
５位	0	10（ 5.18）	21（10.88）	40（20.73）	74（38.34）
不要	0	6（ 3.11）	12（ 6.22）	21（10.88）	25（12.95）
未記入	0	5（ 2.59）	6（ 3.11）	6（ 3.11）	6（ 3.11）

人（%）

表７　実習生の印象を決めるもの

	表情	礼儀作法	姿勢	会話の目線	所作	外見	食事作法
得点	260	492	620	669	714	747	910
１位	**111（65.68）**	28（16.57）	13（ 7.69）	5（ 2.96）	7（ 4.14）	4（ 2.37）	0
２位	37（21.89）	**53（31.36）**	26（15.38）	25（14.79）	14（ 8.28）	14（ 8.28）	0
３位	12（ 7.10）	33（19.53）	31（18.34）	**38（55.49）**	36（21.30）	16（ 9.47）	2（ 1.18）
４位	6（ 3.55）	23（13.61）	**41（24.26）**	35（20.71）	32（18.93）	20（11.83）	12（ 7.10）
５位	3（ 1.78）	14（ 8.28）	33（19.53）	30（17.75）	**36（21.30）**	23（13.61）	25（14.79）
６位	0	15（ 8.88）	14（ 8.28）	21（12.43）	24（14.20）	18（10.65）	**67（39.64）**
７位	0	1（ 0.59）	7（ 4.14）	12（ 7.10）	17（10.05）	**52（30.77）**	47（27.81）
不要	0	2（ 1.18）	4（ 2.37）	3（ 1.78）	3（ 1.78）	22（13.02）	16（ 9.47）

人（%）

視されることは容易に理解できる。

養成校では、大人と子どもの体格差などを具体例にして、大きな身体の暗い色は怖い印象になりやすいので避けるなどを伝え、明るい色合いを選ぶようになど、「保育の場において好ましい服装」の指導することが一般的であろう。また、学生の好みに偏らないことが配慮事項となると考えていた。しかしながら、「サイズ感」の方をより注目すると回答した者の方が「色合い」よりも多く、さらに「色合い」には、「不要」の回答が多いことから、幼稚園教諭にはサイズ感の方が重要であると考えられていることがわかる。この回答も、実習生の受け入れ経験、つまりサイズが合わない服装の実習生の受け入れについて問題を感じた経験があることを推察させるものである。

養成校における「場に適した服装」という指導は、「好ましい服装」ではなく「服装の可否」を基準とする必要があるだろう。

(3)　実習生の印象を決めるもの

実習生の印象を決めるものとして、「表情」「礼儀作法」「姿勢」「会話の目線」「所作」「外見」「食事作法」の７つについて、影響が大きいと思う順に順位をつけてもらった。この質問においては、順位の重複があったものや未記入欄があったものを除くと、有効な回答は169人（84.92％）だった。結果は、表７として示した。これまでと同様、得点はつけられた順位の数字を合計したもので、得点が低いほど、印象に与える影響が大きいと考えられている。各項目で最も多い回答者数を太字にしている。

最も影響が大きいとされたものは「表情」で、

次いで「礼儀作法」となっている。子どもとの生活の中では、子どもに安心感を与える環境を作ることが重要であり、保育者の表情は人的環境に重要な要素であろう。したがって、「表情」が注目され、実習生の印象を大きく左右するものとして認識されることにつながることは明瞭である。「礼儀作法」も同様に、子どもへの影響などから注目され、影響が大きいと考えられる。

前述の化粧や髪色、髪型について「気になる」という回答が多かったことを考えると、化粧や髪色、髪型などが表す「外見」が印象に大きな影響を与えるのではないかと考えられるが、表７に示すように「外見」の得点順位は低く、影響はあまり大きくとらえられていない。しかし、「姿勢」は得点順位で３番目に影響が大きいとされている。「姿勢」は、幼稚園教諭から実習生の「猫背が気になる」「まっすぐに立たず、常に休めの姿勢が気になる」などの身体の構えである「姿勢」についての意見の多さから、「外見」の１つとも考えられるが、「外見」とは分けて別の選択肢とした。質問では立ち姿など見た目の「姿勢」を想定していたが、同じく見た目である「外見」は影響が小さいとされていることや、実習に対する「姿勢」や「態度」などの表現もあることから、「姿勢」という言葉のもつ広い意味が想像された可能性が推察され、選択肢の表現に問題があったといえる。しかし、「姿勢」と表現されるものが、「印象」について大きな影響を与えるものであることは、得点順位の高さからも明らかである。

(4)　実習生の「実習にふさわしい姿」の理解

本調査結果から、実習期間中の主に外見を中心とした「実習生の姿」がうかがえた。

養成校においては、学内の事前指導では「化粧は華美にならないよう控える」「髪色は過度な染髪をせず、髪型は活動の邪魔にならないようにする」など、「幼稚園教諭としての望ましい姿」を伝えることが基本的、一般的指導である。実習期間中は、子どもにとっては「先生」であることから、普段の学生生活の中での流行や好みを基準とした自分なりの姿ではなく、実習生らしい姿であるよう指導する。実習に向けて事前に指導は行うものの、いざ実習が始まれば、各実習生の判断になる。実習期間中の「実習生の姿」は、学内における事前指導の理解の程度を示すものとも考えられる。

まず、実習生の化粧は、学内における指導の範囲内の程度なのであろう。そのため、実習受け入れの幼稚園としては気にはするものの、化粧の程度としては許容できる範囲内であるため化粧をすることを認めているのだろう。化粧については、「華美にならないように」という大まかな基準の指導でも、具体的に「アイラインを引かない」「おかめインコのようなチークをしない」などの例を挙げて程度の解説ができる。また化粧は素顔に加えていくものであるため、加えるか加えないかの判断で、その程度が変えられる。

次に、髪型については日常で学生としておしゃれを目指す髪型と、実習にあたり幼稚園教諭として働くための髪型の違いを十分に理解できていないことが考えられた。髪型は、本人の技術や習慣によるところも大きいが、学生自身である程度は調整が可能なものである。散髪をする、長い髪を結うなど、今ある自分の部分に対しての操作が明瞭である。

これらを考えれば、学生は今ある自分の部分に対して明瞭な操作をする場合は、自身でその「程度」を判断し行動することが可能なのだろう。その判断があった上で適切性に欠けるということは、「実習生にふさわしい姿」の理解が不足していることを示すものである。

実習生の髪色への注目が高い点からは、実習生の髪色は個人によって差が大きいことが推察される。地毛の色は十人十色であり、「自然な色」の幅も広い。また髪色を地毛から変えている学生であれば、脱色と染髪、退色の関係から、常時人工的な髪色になり、それが自然な髪色に近い色もあれば明らかに人工的な色の場合もある。さらに

は、1度でも色を変えられた髪は生え変わるしか、元の自分の色には戻らない。このように髪色は化粧とは異なり、自身で短期間に調整しきれるものではない。髪色が注目のポイントとなっている点は、特殊な髪色の実習生が存在していることを示している。これらを考え合わせると、学生自身が、髪色を操作することの事後の変化と対処法を正しく理解できていないことが推察される。色という明瞭なもので学生自身は実習に適した髪色を正しく判断できていたとしても、それを実現できていない場合があるのだろう。また、服装では、実習中はジャージの着用を指定する園も多い。近年の大学生のジャージ姿は、運動をする授業時であってもダブダブとした大きめのものを着ていて、そこにはジャージ特有のおしゃれな着こなしがあるようである。実習生が、このようなおしゃれを狙ったようなジャージ姿で実習に取り組めば、ジャージであっても活動着としての意味は薄くなるため、適切とは言い難い。このような髪色や服装には、特に大学生なりのおしゃれや流行があり、それが「実習生にふさわしい姿」の判断に強く影響すると考えられる。

このような「実習生にふさわしい姿」の理解が不足している点や、大学生なりのおしゃれや流行に大きな影響を受けていることを考えれば、養成校での事前指導は、その時々の学生にとっての「普通」や学生特有の流行など、学生の状況を的確に把握した授業改善の必要性が考えられた。

5. 総　括

本研究では、幼稚園教諭に実習生の行動や外見、所作をどのようにとらえているのか、実態を調査した。幼稚園教育実習で関係のあった178園に対して調査依頼したところ、84園（47.19％）、199人から回答が得られた。

アンケートの結果、実習生の行動についての注目に関する意見からは、実習生は学生ではあるものの幼稚園教育の場に身をおく際には「幼稚園教諭として」のふるまいが重要視されていることが明らかになった。実習生の印象を決めることへの影響についても、「幼稚園教諭としてのあるべき姿」が基準となっていることが推察された。したがって、実習生の評価については「幼稚園教諭としてのあるべき姿」が根底にあって評価されているため、一般的に考えられる印象が影響を与えることはないことが明らかとなった。同時に、「教員との関わり」や「所作」などの知識や技術ではない実習生の行動が、教員としての資質や教職に対する熱意を量る材料となっている可能性が考えられた。さらに幼稚園教諭の実習生の行動への注目や幼稚園教諭としてのあるべき姿を調査し明確にしていくことで、目に見えない熱意や教師としての使命感などの評価基準が構築できることが示唆された。

また、「幼稚園教諭としての有るべき姿」は、幼稚園や各教諭によって異なることも推察された。そのため、評価はその幼稚園や教諭による絶対評価になり、養成校が実習について評価票を設けていたとしても、具体的到達度が明示されていない限りは相対評価とはなり難い。相対評価をより確かなものとするためには、まずはルーブリックなど評価基準と到達度を明瞭にすることが必須であろう。

謝辞

本研究では、多くの幼稚園の先生方にアンケート調査にご協力をいただきました。深く感謝いたします。

また、アンケート作成については、高知工科大学・中村直人先生、東京未来大学・保育教職センター・前特任准教授・服部かおる先生に有益なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

引用参考文献

文部科学省　幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために」（報告）平成14年6月24日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chou-

sa/shotou/019/toushin/020602.htm
柳澤沙織・古川久敬　対人評価の正確さに関する研究の展望　九州大学心理学研究　第1巻　pp. 79-93　2000
佐藤綾子　非言語表現の威力―パフォーマンス学実践講義　講談社　2014
廣兼孝信・吉田寿夫　印象形成におけ手がかりの優位性に関する研究　実験心理学研究　23巻2号　pp. 117-124　1984
吉田弘司　顔の表情が会話内容の真意性評価に及ぼす効果　比治山大学現代文化学部紀要　第8号　pp. 155-161　2001
尾崎司・中村教子　現場連携による実習評価ルーブリックの開発（Ⅰ）～保育所実習のルーブリック作成に関する予備的考察～　東京家政大学研究紀要　第57集（1）　pp. 31-41　2017
中嶋一恵・浦川末子・白石景一・下釜綾子・永野司・中村浩美・中島健一郎・滝川由香里・本村弥寿子　ルーブリックを使用した学外実習評価基準の作成について　長崎女子短期大学紀要　第38号　pp. 102-107　2014
三木知子　ルーブリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要　第12巻第1号　pp. 1-10　2018

（きうち　なおこ）東京未来大学